

歴史まち歩き

名古屋から世界に向けて拓かれた、名古屋港百年の歴史を辿る

32

近代名古屋港の夜明け

【名港線名古屋港駅1番出口▶名港線築地口駅】

① 奥田助七郎像

京都帝国大学を卒業した後、明治33年(1900年)愛知県に土木技師として着し、築港事業に尽力した奥田助七郎の功績をたたえ建てられた銅像です。

② 人造石護岸

名古屋港築港当時、低価格で丈夫な素材として、埋立地護岸や防波堤など数多く使用されました。人造石は種土(花崗岩が風化したもの)に石灰と水を加え練り固めた「割石積工法」でした。

③ 名古屋港跳上橋

昭和2年(1927年)に旧東臨港線上に造られた可動橋で、堀川と中川運河とをつなぐ水路の堀川口に位置しています。当時は線路の一部として活躍しており、船が通行する際には橋げたを上げて水路への入り口を開けていました。東臨港線は名古屋駅から2号地(現在のガーデンふ頭付近)南側の東端まで開通し、名古屋港駅も開業しました。その後、1号地(現在の築地ふ頭付近)東側の堀川口駅まで延長工事を行う際、この可動橋が整備されたのです。

④ 港橋

名古屋港の1号地埋立地と2号地埋立地との連絡橋として、明治39年(1906年)に建設されましたが、老朽化したため昭和11年(1936年)、現在の永久橋が建設されました。

⑤ 旧東海銀行ビルの金庫

この金庫は、昭和63年(1988年)に再開発のため取り壊された旧東海銀行ビルの中にあつたもので、住民の要望を取り入れた形で壁に埋め込まれたそうですが、何とも不思議な光景です。銘板にはその由来が刻まれています。元のビルの姿を知る方も少なくなっています。

⑥ 十軒長屋

築地地区には戦災の焼失を免れたと思われる長屋がいくつかありますが、その中でもこの長屋は10軒も続いており、独特の景観をつくっています。正面が2階建てで、奥が平屋というパンコ型です。

⑦ 築地神社

名古屋港の総鎮守であり、祭神は海の守護神とされる素戔鳴尊(スサノノミコト)です。昭和13年(1938年)、熱田神宮より勧請し、創祀されています。

⑧ 築地口神社

商店街の入り口近くにある築地口神社には「熱田神宮」「津島神社」「秋葉神社」の3体の神様が祀られており、その中の秋葉神社の祭礼に合わせて毎月16日に縁日を行っています。お茶とお菓子を振る舞い、お客さんはのんびりと世間話を楽しんでいます。

⑨ 南極観測船「ふじ」予備錨(いかり)

噴水の中央にある錨は、昭和40年(1965年)から昭和58年(1983年)まで、南極大陸の観測に従事し、南極観測事業の発展に大きな功績を残した二代目観測船「ふじ」の予備錨です。

名古屋港100年の歴史

- 1896年 第一期着工、水害や日露戦争、強力な工事反対論で工事は難航
- 1906年 巡航博覧船「ろせつ丸」入港
- 1907年 熱田港を名古屋港に改称、11月10日開港
- 1941年～45年 第二次世界大戦、壊滅的打撃を受ける
- 1959年 9月26日伊勢湾台風襲来、甚大な被害を被る
ロサンゼルス港と姉妹港提携を結ぶ
- 1984年 名古屋港ポートビル完成
- 1992年 名古屋港水族館オープン
- 1994年 名古屋港船舶通航情報センター完成
- 1998年 名港三大橋「名港トリトン」開通

葦生い茂る水深1メートルあるかないかの海で始まった港の建設。その見通しの利かなさに噴出する反対の声を乗り越え、名古屋港は自らの航路を刻み始めました。東京、大阪という東西の二大都市圏に挟まれた立地。それでも、中部の独自性をしっかりと受け止めた施策と施設を築き上げることによって、着実にその存在価値を高めてきました。文字通り「築港」と呼ばれた名古屋港のその歴史は、先人の先見性と努力で綴られてきました。今や日本の海上輸送を牽引するまでに発展した名古屋港。世界に門戸を開き、交わった100年を礎に、名古屋港の新たな航海が始まっています。

